

# 子どもの加減行為における育ちの姿

## — 年齢による比較からの考察 —

大澤 洋美・福山 多江子・伊澤 永修・安見 克夫

### 1 はじめに

加減行為については、「子どもがカップの水を他のカップに移すときの行為」や「砂場用のカートを押すときの行為」を観察した際、子どもたちの生活や遊びの中に、力加減、匙加減、手加減といった微妙な調節や調整などを働かせている姿に着目し2016年より様々な視点から研究を重ねている。

その結果、子どもは、衝動的あるいは直感的判断による無意識な行動から、注意深く思考的判断をもった意識的身体行為「加減」を操作し自己性を獲得していくことが明らかになった。そして、子どもが「加減」を繰り返し学ぶことで情動の加減を学び取り、加減を表現する言葉が獲得される（2017 安見ら）ことが分かった。

次に、幼児の無意識的加減から意識的加減までの発話を状態副詞・程度副詞・陳述副詞等に分類した結果、発達とともに、副詞を用いて自己の思いの加減を表現しようとしている傾向が明らかとなり、それらの副詞の獲得には、感情の揺らぎから外言され、相手との感情の揺らぎによって内言化されていき、内言化したものを相手との感情の揺らぎに合わせて「加減」が働き、外言化されるという過程を経ていることが分かった。さらに、感情の揺らぎは、相手がものである人であれば体験的な媒介を必要とするため、幼児期の体験的学びが重要であることが分かり、身体知の「加減」によって生み出されることから、人、物、コト、場所、空間、素材、などあらゆるものに対しての子どもが関わる相手の精選が不可欠である（2018 安見ら）とした。

子どもの感情は、遊びを展開していく中で自分の思いや相手の思いによって常に自己の感情が揺さぶられる。揺さぶられる行為を生み出す環境として、遊びや生活がある。中でも子どもは、個と集団の中で、自己主張と自己抑制とのバランスをとり自己を調整しつつ自己性を形成していく。この自己性を、岩田は、行為の主体としての自己の認識によって形成されていくものであると述べている。つまり、自己性は、子どもの行為の中にある主体的な自己の認識の判断と主張の深さによって形成されていくものと考えられる。今までの多くの研究は、子ども同士が関係する場面での互いの自己調整について「試行錯誤」「葛藤」「喧嘩」「いざこざ」「折り合い」と言った感情の動きを捉え、自己性の認識を分析している。そこで、我々は、こうした子ども同士が関係する場面「試行錯誤」「葛藤」「喧嘩」「いざこざ」「折り合い」といった、今までの表層部分ではなく、こうした行為を表出するに至るまでの過程となる深層的な自己性を形成する要因について、普段の遊びでの身のこなしや、物を扱う時の情動、そして、人との言葉のやりとりに視点を置き、何気なく行っている子どもの「行為」を分析することで、行為の深層で同時に形成される自己性の形成過程を探ることができる。（2019 大澤ら）

本研究は、これらの研究の経過から、3歳児と4歳児の加減行為の比較分析を行い、その加減行為そのものや獲得の過程を明らかにし、子どもの自己性の形成の要因と発達の過程と

の関係を明らかにし幼児への理解を深める質的研究を目指す。

## 2 方法

### ●ビデオ映像視聴による分析

#### 3歳児

検討資料 文部科学省指定教材シリーズ  
幼児理解にはじまる保育①  
「3歳児の世界」岩波映像株式会社

#### 4歳児

検討資料 新規採用教員研修用資料ビデオ  
幼児理解にはじまる保育④  
「友だちに出会う」より2場面を抽出 岩波映像株式会社

### ●検討方法 ケーススタディー（※）により、加減行為の抽出及び検討

※事例研究あるいは事例研究法。個々の事柄について多角的、精細なデータを収集、分析し、その諸因子間の複雑な相互関係を明らかにして、帰納的に類似した事例の原則や法則性の発見を目指す研究法。

## 3 ビデオ分析と検討の結果

### (1) 3歳児のビデオ分析

検討資料 文部科学省指定教材シリーズ  
幼児理解にはじまる保育①  
「3歳児の世界」岩波映像株式会社

抜粋

◆シリュウ及びユウの二人の言動に着目して分析する

ビデオの分析場面

<当該場面までの流れ>

小さなプラスチック製の水槽に入っていた4、5匹のカブトムシを広いところに入れてあげようとプラスチック製の洗面器を持ってきて、そこにカブトムシと一緒に入っていた土を入れた。洗面器は保育室の机の上に置かれていた。ユウ（女児）が保育室に置かれていたカブトムシの入った洗面器を持ってホールに来たところを先生が目にして、洗面器を保育室に戻すように伝えたが戻そうとしなかった。それを見ていたシリュウ（男児）がユウを追いかけ始めるとそれを避けるようにユウはトイレに入って行った。（以下の分析場面へと続く）後を追うようにシリュウ、赤シャツ（男児）の2人もトイレに入って行く。

## 映像の分析場面

シリュウはユウの洋服を後ろから引っ張る。

### →服を引っ張るときの力加減

ユウ：「だめったらだめ」

シリュウ：「さてよ」厳しい顔をする。

シリュウは、トイレの取っ手を持ちながらユウを引っ張る。ユウが前に出ようとする。

### →取っ手を利用しての力加減

シリュウ：「さてよ」とユウを引っ張る。

先生がトイレに入ってきて「あーあーあー どうしたどうした」

先生の言葉を聞いてユウは泣き始める。

### →泣いて訴える

その間もシリュウは引っ張り続けている。

ユウ：「ねえ、引っ張ってる」

ユウ：「やーだ 引っ張っちゃやーだ」

徐々に声が大きくなり、最後の「やーだ」は、金切り声となっていた。

### →気持ちの大きさと声大ききの加減

それでも離さないシリュウにユウは、少し声のトーンを落として、また「やーだ」と言い始め「やーだ やーだ やーだ やーだ」と再び声のトーンを上げていき、最後に「やーだ」と、先ほど以上に強く大きな金切り声で叫んだ。その時、足をバタバタと地団太を踏んだので、体の揺れに合わせてユウが持っていた洗面器が大きく揺れて、洗面器の土とカブトムシが下に落ちてしまった。

### →洗面器を持っている手に加える力の加減

「やーだ」と言いながら、先生の後ろに隠れるユウ。シリュウも覗きこむが、後ずさりして直立不動で、落ちたカブトムシと土を見つめている。

先生が「やだ、やだよー。このカブトムシさんかわいそうなことになっちゃった。」と言って拾い上げる。

「かわいそ。かわいそ。」と先生がカブトムシを洗面器に戻しながら話をしている。その最中に、シリュウは自分で洗面器を持ちあげる。洗面器を動かす。

先生は、「あのね、ユウちゃん」とシリュウの方を見て「シリュウくんカブトムシさんお部屋にもって行ってあげようとしたんだよね。ちがうかな。」

先生：「先生がお部屋に連れて行ってって言ったから。ユウちゃん。」

先生：「シリュウ君、持ってお手伝いしたいんだよ。」

と言っている間に、洗面器の取り合いになる。

### →洗面器を引っ張りあう力加減（限界を超える前）

先生：「ねー、ジャー、一緒にもっていこ、一緒に」

先生：「せーの」

二人に向かって言いながら、一緒に運ぼうとする。

先生が言っている最中にユウがシリュウが持っている洗面器を引っ張る。

ユウが洗面器を叩いたので洗面器の中にいたカブトムシが飛び散りそのうちの一只がユウの手につく。

### →洗面器を叩く力加減（限界を超えた後）

それを先生が離そうとしている。

ユウ：「やだ やだ やだー」 と言ってしゃがむ「ぎゃー」

それでもシリウは洗面器を放さない。

ユウ：「やーだ やーだ おねがい」

先生：「ユウちゃん ユウちゃん ユウちゃん ユウちゃん ユウちゃん」

ユウ：「痛い ギャーギャー」

先生：「あー カブトムシさんも……」

シリウは洗面器をもって洗面器の中を見ている。

先生：「……ありがとう」

先生：「シリウ君はたぶんお部屋に行くんだと思う。見てて。」

シリウは先生が戻したカブトムシをいれて、走り去る。

先生：「ユウちゃん一緒に行こう」

シリウは部屋の机の上にカブトムシの入った洗面器を置く。

### 【ケーススタディーの結果】

このビデオでは、気持ちの高ぶりから声が徐々に大きくなり気持ちの限界点を越えたところで金切り声に変わる声の「大きさ」の限界点や地団太を踏んで洗面器を持つ手に力が加わったときに中のものが飛び出してしまう「力」の限界点などが確認できた。

#### 力加減に注目する

- これ以上力を加えると壊れるとか、だめになるといった経験から、そのものにこれ以上力を加えてはいけない限界点があるということを知ることとなる。
- 逆に、これ以上力を弱めると、成功しない、思うようにならないといった経験からこれ以上力を抜いてはいけない限界点があるということを知ることができる。
- さらに、何度かそのような失敗を繰り返すうちに、それぞれの限界点を体感的に知ることができる。

#### これらの行為から

- 加減行為の獲得には、加減感覚が育まれることが必要となる。
- その加減感覚は、日々の生活の中で様々なことを体験することで生まれ、何度も繰り返し体験することで研ぎ澄まされていく。
- その加減感覚を学び・伸ばす際に、重要な鍵となるのが、失敗経験だと考えられる。

## (2) 4歳児のビデオ分析

検討資料 新規採用教員研修用資料ビデオ

幼児理解にはじまる保育④

「友だちに出会う」より2場面を抽出 岩波映像株式会社

### ビデオの分析場面

<当ビデオの内容>チャプター「6枚持っている すごいだろう」

遊びに使うものを作れるようにと、1週間前から色画用紙を出している。ここ数日、男の子たちが同じような武器を競うように作り始めた。ダイスケもいくつも同じ形の武器を作り、友達に自慢している。遊びが楽しくなるように教師が怪獣をぶら下げしてみる。ダイスケは少し遊んではまた武器を作る。たくさん作ったのでかごに入りきれないほどになった。

### 映像の分析場面

◆ダイスケの言動に注目して分析する

#### 【ビデオの分析場面1】

##### ① ダイスケの言葉と行動

友だちに向かってダイスケが話をする。

「わたし、ぶき 6まいも もってる。すごいだろ。」

「おれ、これくらいもってる。みる。」

自分が伝え相手を見つけて話しかけている。

自分が先頭に立ちたいという気持ちから、自分の武器の数を示して、相手との距離を測っている様子である。

➡友だちへの気持ちの表し方の加減

##### ② ダイスケの行動

自分の太さを考えながら紙を丸めて武器を作る。

➡ちょうどよい太さにするために力加減をする。

作った武器で敵に見立てた天井から吊るしてある怪獣をたたく。

➡手作りの怪獣の動きを見ながら動きを加減する。

##### ③ 加減の域を超えて戸惑う

新しく作った武器をまとめてかごに入れて棚に押し込もうとする。力を入れると入ったが、すぐに戻って武器が床に落ちる。「もう」と小声で言いながらいらだって武器が入っているかごをたたく。

➡力加減をしながら押し込むが、失敗をする。

もう一度、保育者と一緒にいれ直す。

➡気持ちを整えて、意識的な加減する。

<当ビデオの内容>チャプター「かわいいひとははいれない」

## <ビデオ概要>

園生活にも慣れ、子ども同士のトラブルが増えてきた。リナのシャボン玉を壊したり、通せんぼをしたりするダイスケ。今度は、ヒロキを仲間に入れることを拒んで知る。

友だちが嫌な気持ちになる言葉や行動をとるダイスケ。保育者はダイスケの気持ちを考えながら、友達の嫌な気持ちを伝えたいと思って関わっている。

### ① ダイスケの言葉と行動

ヒロキがダイスケいる遊具と一緒に乗りたくても寄っている。

「ヒロキだめー。」

「おとこのかっこいいひとしかはいれないの。」

「ヒロキかわいいからダメ。」

「でもさ おとこらしいかっこいいひとがはいらないとだめ ヒロキ ただかわいいだけだから。」

ヒロキの様子を見ながら言葉を増やして、ヒロキを入れたくないことを言い換えて伝えている。

#### ➡言葉の加減

### ② 保育者とのやり取り

ヒロキを仲間に入れようとしめないダイスケに対して保育者が問いかける。

保育者 「どんな修行をしたらいいの。」

ダイスケ 「とまとを食べるしゅぎょう。」

「とまとたべられる？」

「ぶちとまとと みにとまとと とまと。」

保育者 「三つ食べられると合格？」

「ヒロキ君トマトを食べる修行だって。」

「ヒロキ君トマト食べられる。」

ダイスケに向かって

「ヒロキ君は三つ食べられるんだって。」

「ダイスケ君たべられる？」

ダイスケ 「たべられない。」

保育者 「じゃあ、食べられるヒロくんの方がすごくない？」

ダイスケ 「たべられない。」

と言って背中を向ける。

保育者の言ったことに対しては、答えなければならないという思いで答えている。

#### ➡態度の表し方を（相手によって）加減する

修行の内容は、自分に出来そうなことを考えて伝えている。

#### ➡予測と加減

保育者の「ヒロくんの方がすごくない？」の問いには、自分が優位になれないことを感じただため、答えずに背中をサッと向けている。

#### ➡態度で心の加減を表す

### 【ケーススタディーの結果】

ダイスケの加減の行為は、その状況の中で物や人に向けられ、意識的に力加減、無意識的な力加減、友だちへの言葉の表し方の加減、声の大きさの加減、態度の表し方の加減等を確認できた。これらの加減は、様々に絡み合い表面的に表れる加減だけでなく、ダイスケの心情と深く結びつき、複雑に関係し合っていることを確かめることが出来た。

#### 力加減に注目する

- これまでの経験から、成功をイメージして力加減をする様子が見られる。
- 上手くできないことがあっても、微妙に力加減を加えながら目的を実現していくための行為が出来るようになっている。
- 加減をして、出来ないことで限界点を超えると、戸惑いという行為が見られる。

#### 態度や言葉の加減に注目する

- 自分の中の感情から、理由ははっきりしないが好きな相手や嫌いな相手に対して、言動を変化させている。その際、相手の行動や反応を見ながら、言い方を意識的に加減する行為が見られる。
- 相手の反応を予測しながら、声の大きさを加減したり、態度を加減したりしている
- 自分が優位に立ちたいという思いが加減を伴う様々な言動に現れている。一方で、自分に不利益な状況には、無意識的に向けず（体の方向）回避しようとする態度が見られる。

#### これらの行為から

- すでに獲得されている加減行為もあるが、獲得された加減行為がさらに分岐またはその質を高めていく。
- 加減感覚は、日々の生活の中で様々なことを体験することで生まれ、何度も繰り返し体験することで研ぎ澄まされていく。
- 3歳児と同様に、加減感覚を学び・伸ばす際に、重要なカギとなるのが、失敗経験だと捉えられるが、加えて、体験の中での予測する力も加減感覚に大きくかかわっている。
- 4歳児では、人とのかかわりの中で生じる様々な心の感覚も、加減行為に大きくかかわり複雑に働いていることが分かる。

## 4 3歳児と4歳児の行為の比較

表1 加減行為の対象についての比較

年齢	加減の内容	加減の対象
3歳児	服を引っ張るときの力加減	物
	取っ手を利用しての力加減	物
	洗面器を持っている手に加える力の加減	物
	洗面器を引っ張りあう力加減（限界を超える前）	物
	洗面器を叩く力加減（限界を超えた後）	物
	泣いて訴える	人
	気持ちの大きさと声大きさの加減	人
4歳児	ちょうどよい太さにするために力加減をする。	物
	手作りの怪獣の動きを見ながら動きを加減する。	物
	力加減をしながら押し込むが、失敗する。	物
	気持ちを整えて、意識的な加減する。	物
	態度で心の加減を表す。	人
	予測と加減	人
	言葉の加減	人
	態度の表し方を（相手によって）加減する。	人
	友だちへの気持ちの表し方の加減	人

ビデオ分析で、加減の行為として取り上げ行為から、その行為の対象が、物であるか、人であるか、その両者であるかについて検討した結果を表1に表した。

3歳児は加減の対象は物が中心であることに対して、4歳児は人が対象である割合が増えている。成長に伴って行為の対象や行為の起因することが、それまでの体験から生まれる、予測や知識・感覚が絡み合い複雑になっていると考えることが出来る。自己性を中心にしながら、他者への関りを広げていく3歳児から4歳児の育ちの姿を確認することが出来る。

## 5 考 察

<失敗経験の重要性>

加減感覚を学び・伸ばすために重要となるのが、失敗経験だと捉えた。これ以上力を加えると壊れるとか、これ以上の言葉を言うと相手が怒る・泣くなどの体験から、物や物事に限界点があることを知ることとなる。さらに、何度かそのような失敗を繰り返すうちに、それぞれの限界を体感的に知ることとなり、成功するための範囲（ZOON）を学ぶことが出来る。当然大成功も大切な経験ではあるが、加減の学習材料としては失敗経験がとても重要なもの



であると考えられる。

今回取り上げた加減行為の他にも、様々な種類の加減行為があり、それぞれに範囲が存在をする。大きさ、長さ、高さ、広さ、重さ、強さ、温度、難易、厳しさ、優しさ、怒り、その他いろいろな事象に関する加減行為にも、それぞれについての範囲も存在するものと考えられる。今後は、多様な方向から範囲を図る尺度についても、加減行為の視点から掘り下げていきたいと考える。

#### <加減行為の深化>

今回は、加減の対象物から3歳児と4歳児の比較を行った。人とのかわりの中で増し幼稚園、保育園という集団の中で多様な体験をするようになる、3歳から4歳の育ちの道筋の中で、加減感覚を獲得して加減行為を重ねていくことは、幼児の身体知に大きく影響を及ぼすと考えられる。幼児の育ちにおける感覚の獲得と加減行為の体験の積み重ねについてさらに探求を深めていきたい。

どの行為の何が、その行為に関係していたかという表層的な捉え方ではなく、何が加減の行為を引き起こす起因であり、その行為の中で意識と無意識にどのように関係しているか等については、対象を増やす中で質的観点からの読み取りをすることで、幼児の加減行為から幼児理解の視点を広げ、理解を深めることが可能になると考える。

#### 出典：

文部科学省指定教材シリーズ

幼児理解にはじまる保育① 「3歳児の世界」 岩波映像株式会社

新規採用教員研修用資料ビデオ

幼児理解にはじまる保育④ 「友だちに会おう」 岩波映像株式会社

#### 参考文献

岩田純一 『子どもの発達の理解から保育へー〈個と共同性〉を育てるために』 ミネルヴァ書房、2011年。

マイケル・ボランニー著、高橋勇夫訳 『暗黙知の次元』 筑摩書房

「葛藤場面からみる保育者の専門性の探究」 2013幼児教育研究部会：公益財団野間教育研究所紀要 第52集

